緋弾と無限剣

カニカマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾と無限剣

【Ｎコード】
Ｎ７０５６Ｗ

【作者名】
カニカマ

【あらすじ】
東京武偵高２年の神代桜火と遠山キンジは爆弾の爆発を避けるためチャリを全力でこいでいた、そして誰かか落ちてきた。そいつの名は神崎・Ｈ・アリア！？――――――できるかぎり定期更新の小説第１弾始まりっ！

チートすぎたので、いろいろと修正しています

ａｃｔ１　アリア編　１（前書き）

始めましてカニカマです。１週間に一回のペースで更新しますので
ご了承ください。
アドバイスなどは、コメントにお願いします。
見苦しい人はご退出お願いします。

act1　アリア編　1

――――――空から女の子が降ってくると思うか？
特に大した理由はない。昨晩俺が、某ジ○リ映画を見たからだ。ただし俺は降ってきてほしいなんて思わない。もし、そんなことがあったら、何やら面倒なことが起きるからだ。俺は永遠にこの道を通ったことを悔やむだろう。

俺、神代桜火は東京武偵高へ近道を使っていた。武偵高とは、『武』力を行使する探『偵』を育成する高校のことだ。時間は7時３０分、まだ余裕の時間だ。俺はスピードを上げようとすると。
「おいっ！」
「キャッ！」
ガシャン
俺は不穏な空気を感じた。
「何かしら事件の感じだな…」
俺は、音のした方向にチャリを飛ばした。
そこには武偵高の女子生徒と思われる人物と、完全なチンピラがいた。
「あぁん？何だてめぇは？」
まさか武偵高の制服を知らんやつがいたとは…
「ただの武偵だ」
俺はやる気のなさそうに言うとチンピラは俺を弱いと判断したのか―
「で？その武偵様が何の用で？俺はただ、ぶつかってきたやつにお礼をしているだけなんだがな」
女子生徒をみると、少し血が出ていた。ここで俺の中の何かが切れた。ＳＳ（サヴァン・シンドローム）、俺の体質だ。
「おい、そこのチンピラ」

俺は少し殺気をこめて言って
「その生徒はお前に意図的に暴行を加えていないだろ？」
俺の推理が正しければ、この生徒は暴行を加えてない。返事がないのは肯定と受け取っていいと習ったしな。
「肯定と受け取った。お前を暴行罪の罪で逮捕する」
俺が言うとチンピラは俺をからかうように言った。
「逮捕だぁ？お前みたいな餓鬼に何ができる？」
おぉチンピラがガキの漢字を知っていたぞ。
「お前でも武偵のランクは知っているよな？…俺のランクはＳだ」
本当はさらに上だけどな、チンピラにはわからんだろう。というより自慢したくないんだ。武偵関連の事を。
「このクソガキがぁぁぁぁ！！！」
チンピラはナイフを持って突っ込んでくる。これくらいは軌道を読まずに回避できるだろう。俺は左に回避すると、女子生徒を抱えチンピラの首にナイフを当てた。
「これ以上やるなら。本気を出すぞ？」
俺の背中で１３本のナイフや日本刀が翼のように開く。これが俺の２つ名『無限剣』の付いた理由だ。
「お前、まさか『無限剣』か？」
『無限剣』を知っているのか。武偵以外は知らないはずだがな…
チンピラが低抗をやめたので手錠をかけ警察を呼ぶ、これで仕事は終わり。そして俺は抱きかかえたままの女子生徒に優しく微笑みかけた。
「大丈夫かい？」
「だっ！大丈夫です…」
そのまま激しく赤面すると俺の手から逃れさっさと走って行ってしまった。そして俺はあわてて時間を確認した。時間は…７時４５分。
「やべぇ！遅刻する！」
俺はそれから約１５分後に学園島の入ると俺のように自転車を漕

ぐ奴がいた。アイツは…キンジ！俺は走り寄ろうとしたが後ろから人の声ではない声がした

「その　チャリには　爆弾が　仕掛けられてやがります　速度を落としたり　チャリから降りると　爆発しやがります」

「何だと！」

まさかとは思い、キンジをみるとアイツもセグウェイに追いかけられている。少し速度を上げ、キンジに近づくと、キンジもこっちを見た。

「来るな桜火！このチャリには爆弾が仕掛けられている！」

「分かってる！俺もその仲間だ！」

どうする…俺一人なら助かるが、キンジも一緒となると自信無くなるぁ。しかもこの手口は『武偵殺し』。模倣犯ではないだろう、おそらく本人だ。

「キンジ！第二グラウンドに行くぞ！」

第二グラウンドなら、誰もいないだろう。そう思って周りの安全を確認した。すると第二女子寮の屋上にツインテールの少女が。キンジも気づいたらしくそっちを見上げてる。そしてそいつは…飛び降りた！？いや、パラシュートでこっちにむかってくる。

「ばっ馬鹿！来るな！この自転車には爆弾が――――」

すると少女は太ももから二丁のガバメントを取り出した。あいつのやりたいことは分かった。あのパラシュートで俺たちを助ける気だろう。

「ほらそこの馬鹿ども！さっさと頭下げなさい！」

ババババババッ！

俺たちが頭を下げるより早く2丁のガバメントで、後ろのセグウェイを破壊した。

俺はキンジ達から離れながら言った

「俺は一人で助かるから。そいつを頼む！」

少女は俺の言っていることが分からない、というような顔をした。だが分かったらしくキンジを助け始めた。

さて、俺はまずワイヤーを地面に打ち込んで刺さっていることを確認し、チャリからジャンプした。そしてリールでワイヤーを巻き上げる。チャリは爆発したがどうにか生き延びた。…あのチャリ5万もしたのに。

そしてキンジと少女の安否を確認するために体育倉庫に行った。…つか、爆風で体育倉庫の飛び箱に入るってどういう奇跡だ？

「キンジ、言い逃れはできないな」

キンジは見事に飛び箱にはまり少女の服を脱がしているように見える。

「そう思うなら、助けてくれ！」

「はいはい、分かりましたよ」

俺はそう言いながら少女を箱から出してマットの上に寝かせた。

「そいつの名前は神埼・Ｈ・アリア。そういえば、お前どうやって逃げたんだ？」

キンジは俺がどうやって爆弾から逃げたのかが不思議なようだった。

「ま、それはＳランクの不思議ってやつで」

「いや、ぜったいＳランクじゃないな」

俺たちが談笑していると。

ババババババババババババババババッ！

７台のＵＺＩによる大量の弾丸が俺たちに向けて飛んできた。

「あぶないな…」

キンジは首だけで弾をかわす。

「はぁ、またか…。キンジ援護してくれ！」

「分かった！」

余談だが俺は弾を全て斬っている。

キンジによる援護射撃の中、俺は全ての弾丸をよけながら一台一台切り捨てていった。

「これでラストか、まだまだ弱いな」

最後の一台を切り捨ててキンジの場所に行こうとするとアリアが起き上がっていてこっちを見て何か言いだした。

「あんた、何者？7台のＵＺＩの弾をよけるなんて人間業じゃないわ」
まぁ、普通の人間なら無理だな。今の俺は、さっき女子生徒を助けた時に残っていたＳＳでどうにかしたからな。
「俺か？ただの武偵、強襲科のＳランクの神代桜火だ」
「あんたもＳランクなのね、そこのあんたも、的確な射撃、ＳかＡよね？」
アリアはキンジを見る。なぜか若干顔がイケメンに見えるのは多分、ＨＳＳ（ヒステリア・サヴァン・シンドローム）が発動しているからなんだろう。つか、いつ発動した？
「違うな、俺はただのＥランク、射撃がうまく見えるのは前、強襲科にいたからだろう。」
このキンジはえらく謙遜だからな。実力はＳくらいあるだろうに。
「まぁいいわ。それよりあんた、わたしと決闘しなさい！」
はい？今何と言った？
「決闘ならお断りだ。相手になる奴がほとんどおらん」
俺は背を向けて校舎に歩き出す。念のために弾ばら撒いとこう。
「待ちなさいよ！逃げる気？」
案の定追いかけてきやがった。しかも2本も刀抜いてやがる、こいつ双銃双剣（カドラ）か？そしてそのままばら撒いた弾を踏んで――
――ドーン！
あーあ踏んじゃったよ。武偵なら足元くらい見ろよ…
「キンジ、そいつ置いて行くぞ。」
「分かった。」

俺たちは教室に行くと後ろの扉から入った。
「すみません、事情があって遅れまし――」
「先生、わたしあの二人の隣の席がいい。」
「先生！私はあの金髪のお兄さんの隣がいいです！」
「よー、キンジ、桜火、やっとお前らにも春がｋごふっ！？」

てめぇは黙ってろ武藤。
金髪はこのクラスには2人しかいない。そしてお兄さんと言えば俺なのだが…あの女子生徒の顔どこかで……っとそれより！
「「アリア！なぜお前がこのクラスにいる！」」
クラスの武藤以外が俺とキンジの顔を見る。
「あら、言って無かったっけ。わたし、2年よ。」
は？このチビは何を言っているんだ？中学2年の間違いじゃ？
「あれ？『無限剣』のお兄さん、私には気づいてくれないの？」
って！アイツはさっき助けた女子生徒じゃないか！
「頼むからお兄さんはやめてくれ！俺の名前は神代桜火だ！後2つ名もやめてくれ！」
あれは学校でばれるとヤバイんだって！
「はーい理子分かっちゃった～！転校生さんはしんちゃんを『無限剣』と間違えちゃって、ツインテールさんはキー君としんちゃんで取り合いっこしてるんだね！」
取り合いっこってなんだ。後、ほとんど間違えてるぞ。
そういえばここは馬鹿の吹き溜まり、武偵高。
そこでクラスは大盛り上がり、説得のしようがない。
「まさか桜火まで？」「絶対そんなことしない人だと思ってんだけどな～」
「お前らなぁ…」
ババン！
突然鳴り響いた銃声が教室を凍らせる。
「恋愛なんて……くだらない！」
武偵高では銃は必要以上に発砲しない。と、いうことになっている。つまり、してもいい。まぁ、ここの生徒は日常茶飯事に銃弾の飛び交う武偵になろうというのだから軍人並みに神経を麻痺させておく必要がある。だからと言って、自己紹介で発砲したのはこいつが初めてだろう。
「全員覚えておきなさい！そんなくだらないことをいう奴は———

―」

それが、神埼・H・アリア全員に向けて発した最初のセリフだった

「――風穴開けるわよ！」

昼休みになると質問しにくる馬鹿どもから逃げるために強襲科の屋上に来ていた。キンジも同じなのだろう。理科棟の屋上に姿が見える。

「あ、お兄さ――桜火君ここにいたんだ。」

不意に後ろから声が聞こえる。この声は…あの時の女子生徒か。そういや名前聞いて無かったな。

「んで、何の用だ？」

その女子生徒は黙って話さないでいる。

こういうのってきついな、あまり女子と話さないからか。向き直って話を聞こうとして振り向くと、不意にキスをされた――――

「えぇぇぇぇぇ！？何してんの！？」

女子生徒はキョトンとしている。

え？何？俺が悪いの？

「落ち着いて、要件だけを話してくれ」

俺は女子生徒を落ち着かせようと肩に手を置いた。すると女子生徒は落ち着いたように話し始めた。

「あ、あのね…私の…マイの恋人になって下さい！」

俺、神代桜火は、人生初の告白で、驚きのあまり意識を失った――――

2（前書き）

すみません、桜火のプロフィール出してなかったですね。

神代　桜火

通称、『無限剣』　ランク、Ｓ　学科、強襲科
使用武器、Ｃｚ７５、オートマグ？、ナイフ×２（？？？？）、日本刀×１４（？？？？）
体質、ＳＳ（自分以外が傷つくことによって発動）、不幸

2

俺は気が付いたら知らない部屋の知らないベッドで寝かされていた。

確か俺は…マイに告白された→人生初のキス&告白→驚きのあまり気絶。…何やってんだよ、俺…。なぜか寝ていられず起き上がると。急にドアが開き、キンジが入ってきた。

「気が付いたか、桜火。」

キンジは心配していたのだろう、枕の横には水の入ったコップと水筒があった。

「あぁ」

「ならよかった。いきなり教室に1年のマイが看護科の連中とお前をかついでくるんだ、すごく心配したぜ。」

まじか…あいつ1年だったのか。…看護科にまで迷惑かけたか。ほんと駄目だな、俺も看護科も。なんで教室何だ？保健室でいいだろ。

「んで？マイはどこだ？少し事情を聴かんといかん」

なぜ告白したのかと、なぜ俺なのかの理由だ。いきなり告白されてこっちは気絶までしたんだ。聞く権利はあるだろう。

「アイツは今リビングにいるよ、呼んでくるか？」

俺がいま動けないからな、キンジに頼むか。

「あぁ、頼んだ」

マイは寝室に入ってくるといきなり謝ってきた。
聞けば、俺がチンピラから助ける前に俺の事は知っていたそうだ、そしてその俺がマイを助けた、そして最後の笑み、これがいけなかったらしい、これでマイは俺に一目で惚れて2年の転校生になろうとした、というものらしい。最後以外はよくある話だ。
そして俺は本題に入った。

「マイはもう知っているが、キンジ、俺が『無限剣』だ」
「お前が『無限剣』だったとして俺にどうしろと？」
「お前ら、ぜったいに俺が『無限剣』だってこと話すなよ。要件はそれだけだ」
「それじゃあマイ、お前はかえっていいぞ」
「はい…」

話に入れなかったのが悔しいのか、マイはうなだれて帰っていく。
「つか…お前、いきなり後輩に告白されるってどういうことだよ」
それに関しては何も言えないので正直に言う。
「さぁ、知らん」
ピンポーン
何か嫌な予感がする…
「キンジ、あれは開けないほうがいいと思うぞ」
開けに行っていたキンジをすんでのところで制す。

ピンポピンポピンポーン
　やっぱり嫌な予感がする。
ピポピポピポッピポッピポッポピンポーン！
　なんか某ボーカロイドの歌みたいになってるよ！

「あぁもう！うるせーな！」

キンジが切れて玄関に行った。キンジ、ご愁傷さまでした…
――誰だよ…。
扉が開く音とキンジの声が聞こえてくる。
――遅い！あたしがチャイム押したら5秒以内に出ること！
　やっぱりアリアか…！
――桜火もいるわよね？連れてきなさい！
おいおい俺も、正直むり――
――無理だ、アイツはまだ動けない。
ナイスだ、キンジ！
――じゃ、どこ？行くから。
え？まじ？
――右の寝室…
教えるなよー！！
「ここにいたわね桜火、キンジ。あんた達！私のドレイになりなさい！」
今ここに俺の不幸な物語が始まった。

……
……
……ありえんだろ、こいつ。いきなり俺に決闘しろなど、俺達の隣の席に来るなどわけがわからん。
「ほら！飲み物くらい出しなさいよ！」

ぼふっ！
アリアは盛大に俺の上に座った！
「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！1分以内！」
「その前にどけ！」

ありがとうキンジ、もう少しで潰れかけたよ…
アリアとキンジがリビングで怒鳴りあっている。あぁ…また嫌な予感がする…
――――――出てけ！
あぁキンジお疲れ…と思ったらアリアは俺も外へ摘まみだした。

俺とキンジは下のコンビニで時間をつぶした、さすがに立ち読みだけでは悪いと思い、キンジは漫画、俺は甘いものが好きだから、ももまんと、キャラメル、カル〇スを買って家に帰った。家には普通に入れた、だが俺の嫌な予感レーダーが鳴りやまない。リビングに明かりが点いていないことからリビングにいないことは分かる。だが後は風呂しかないのだが…
ピン、ポーン
ヤバイ！この感じは2年C組の星伽白雪！
俺はキンジにアリアの武器を回収するように言い、自分はドアのぞき窓から外をうかがった。
「んん？何だ？こんな時間に？」
俺は平静を保ちつつドアを開け用件を聞いた。
「こんばんは、桜火さん、きんちゃんはいますか？」
きんちゃんとはつまりキンジのことで星伽とは幼馴染だ。
「いまアイツは部屋で銃の整備をしてるよ」
「そうですか…それじゃ後できんちゃんと食べてください」

「ほいほい、了解した」
「えっと…今日の爆破事件、きんちゃん達だよね」
なんだ、そんなことかと内心で安心する。女の匂いがする、とか言われたら俺は逃げるところだった。
「あぁそうだが、何？」
「怪我は無い！？きんちゃん！」
――――あぁ大丈夫だ。
一応声が聞こえる。
それを聞いて安心したのか、白雪は帰って行った。

2（後書き）

今回は、短めです。ごめんなさい。でも、ちょくちょくあげるので、ご了承ください。

3（前書き）

今回は、マイのステータスです。

マイ

ランク、C　学科、強襲科

使用武器、ダブルイーグル、ククリナイフ

体質、ネタバレになるのでまた今度。

3

翌朝、俺は顔が陥没する音を聞いた。
「いつまで寝ているのよ！ご飯、出しなさいよ！」
「そんなものはない、リビングにももまんがあるからそれでも喰ってろ」
俺は忌々しげに言うと、アリアは飛び上がるような速度でリビングに走っていった。
――――なんだ、アイツ？ももまんがそんなに好きか？
一瞬そんなことを思ったが無視した。そして俺は、反対のベッドで俺と同じく顔が陥没して気絶しているキンジを起こした。
「キンジ、気絶してないで起きろ。７時５８分のバスに間に合わんぞ」
キンジは起きていて、あえて無視していたらしい。
「あぁ、分かった。おーいアリア、登校時間ずらすぞ」
これ以上俺達の評価が下がるときついからな、俺の人生的にも、キンジの転校的にも。キンジ、ナイスな判断だ。
「なんで？」
「なんでも何も俺達がお前と一緒に出ると厄介なことになる。ここは一応男子寮だからな」
「うまいこと言って逃げるつもりね！」
「同じクラスだし、俺達は隣の席だ！逃げようがないだろ！」
言ってて自分の不幸体質が嫌になってきた。事実だからしょうがないが、誰かどうにかしてくれ。
アリアはむぅううううとほっぺを膨らましていた。
「そんなフグみたいに膨れても駄目だ、別々に部屋を出るぞ！」
「やだ！逃がすもんか！キンジ達はあたしのドレイだ！」
「いつから奴隷になった！俺は了承してないぞ！」
言って俺は腕をかわす、キンジはとっくにつかまっていた。

「は…な…せ…この！」
「キンジ、頑張れよ！」
キンジには悪いが先に行かせてもらう。この時間なら7時４５分のバスに乗れるだろう。
「おい！逃げるな！」
キンジ…すまん！
俺はベランダからワイヤーを使って降りた。ちょうどバスが来たようだ。キンジ達は――――
――――はなせ！この！
――――がう！
まだやってるのか、部屋から声が聞こえる。

俺は一般科目の授業が終わってキンジとクエストに行こうとすると、アリアが探偵科の前にいた。
「なんで、お前がここにいるんだよ！」
「あんた達がここにいるからよ」
まったく答えになってない。
「おい、強襲科の授業、サボってていいのか？」
キンジがキレ気味に言うと、
「桜火はどうなのよ、あんたも強襲科なんでしょ？」
俺はただ、キンジのクエストを手伝いに来ただけなのだが…
「俺はもう6年分の単位をそろえているから大丈夫だ。それでキンジのクエストの手伝いだ」
俺が状況を説明すると、アリアは不機嫌そうな顔をした。
普通、校門で女子生徒が待っているとなると、全国の高校生には嬉しいシチュエーションなのだろうが、相手は事あるごとに2丁拳銃を振り回す凶暴女だと、このシチュエーションは不成立だと言わざるをえない。
「で、あんた普段どんなクエスト受けてるのよ」

「お前には関係ないだろ。Eランク武偵のお似合いの、簡単なクエストだよ。帰れっ！」
武偵高の生徒は、一定の訓練期間を過ぎると、いきなり民間からの依頼を受けることができるようになる。町で事件の現場に偶然居合わせたら、そいつを解決してもいい。
で、それらの実績と各種試験の成績で、生徒にはA～Eの『ランク』を付けられる。その上にはさらにSランクという特別なランクもあって、キンジは入試の時Sランクに、俺は実力でSランクに格付けされている。
まぁ、キンジの場合…白雪のせいで、HSSのなってたからなんだよな。
「あんた、本当にいまEランクなの？」
「あぁ、1年の期末試験を受けなかったからだな。ていうか、俺にランクなんて関係ないからな」
「そっちのあんたは？」
アリアは、今度は俺を見る。
「…Sランクだ」
「嘘ね、UZIの弾幕をよけるなんて、わたしも出来ないもの」
「じゃあなんだ？俺がランクを偽装してるとでも？」
「噂には、さらに上のRランクっていうのもあるみたいだけど…」
「それはないな。俺はただのSランクだ」
「まぁ、ランクなんてどうでもいいけど。で、何のクエスト受けたの？」
「お前なんかに教える義理はない」
「あんた達、風穴開けられたいの？」
イラッとした表情のアリアが、拳銃に手を伸ばす。
「……今日は猫探しだ」
これでアリアが興味をなくしてくれるといいのだが…そんな簡単にはいかないか。
「青海に猫を探しに行くんだよ、報酬は1万、0．1単位分、参加

人数は最高2人、募集科目は強襲科、探偵科、情報科、あと狙撃科だ」
キンジが極端に説明を省くので、俺が説明を付け加える。
まぁ、キンジの事だ、探偵科の中で一番簡単で一番地味なクエストを選らんだのだろう。
「面白そうじゃない、わたしも手伝ってあげる」
は？今何て言った？
「話を聞いて無かったのか？参加は最高2人、俺とキンジで満員だ」
「いいから、あんた達の武偵活動を見せなさい」
「「断る。ついてくるな」」
「そんなにあたしが嫌い？」
「「大嫌いだ。ついてくるな」」
「もっぺん『ついてくるな』って言ったら風穴」
風穴は開けられたくないし、何度言っても付いてきそうだったので、もう諦める。そのままアリアを引き連れ、青海へモノレールで移動する。
「で？猫探しって言うけどどういう推理で探すの？」
「別に、桜火に任せる。アイツは猫の行きそうな場所を瞬時に見分けられるからな」
「というより、俺はそのためについてきた」
俺は、猫が大好きだ。犬はどうも苦手で、触ることもできない。正直猫を飼いたい。ただし寮はペット禁止だし、飼ったとしても流れ弾で死にそうだからいやだ。
「そういうお前は、何か考えてきたのか？」
俺達はアリアに尋ねる。
「推理は苦手だわ、一番の特徴が遺伝しなかったもの」
アリアは一瞬何か悲しげな表情をした。俺の気のせいか？
「ていうか、おなか減った」
「さっき飯食わなかったのか？」
「食べたけど減った」

なんという体の構造しているんだ？
「なんかおごって」
「いきなり脚引っ張りやがって…」
そういえば、キンジもクエストを選ぶのに手間取って飯食って無いな。
「それじゃ、俺が金出すから、なんか買ってこい」
「すまんな、いつも」
俺は財布から５０００円札を取り出してキンジに渡す。
「大丈夫だ、お前の財布の事情は知っているし、俺も金の使い道がないんだわ」
俺は、６年分の単位を取ってるせいで、財布の中に１０万、銀行に７億ほど預けている。腐るほどあるってのはまさに、これの事だな。
キンジはアリアに言われてギガマックと、自分のメガマックを買ってきた。
俺はマックの前で待ってたが、アリアがいない。遠くを見ると、アリアらしき人物が高級ブティックの前でマネキンを見ていた。
なるほど、ああいうのに憧れているのか。
「おい」
「――――あ」
何が、あ、だおい。
振り返ったアリアは俺達が含み笑いしているのに気づいたらしく、ぼんっ！と顔を赤くして手をぶんぶん振った。
「――――ち、違うの！あ、あたしはスレンダーなの！これはスレンダーって言うの！」
「まだ何も言って無いだろ」
「っていうか憧れているのか？」
そしてキンジ達は、反対側の公園に入っていく。俺はこの公園に猫がいないことをさとり、公園の外で待っていた。
俺は、この公園が嫌いなんだ。

中を見ると、中はカップルまみれ。俺の苦手な空間だから俺は入らなかった、それにアリアも今気づいたらしく、ボンッと顔を赤くしている。

———あ、いまアイツ、キンジのコーラ飲んだぞ。あ、吐き出した。何故、キンジが殴られた？

「よーし、おとなしくしてろよー…」

公園から出た後、俺達は運河に来ていた。そして予想通り猫を発見すると、猫の救出に向かった。

「よしよし、いい子だ…」

そして、俺たちの猫さがしは終わった。

3（後書き）

すみません。マイはこれから少しずつしか出ません。

4（前書き）

今から1巻の終わりまで一気にあげます。

4

猫探しで０．１単位貰った――――その翌日。
「理子」
メールで呼び出しておいた通り、理子は女子寮の前の温室にいた。
ここは人気かなく秘密の打ち合わせをするにはちょうどいい場所だ。
「キー君！しんちゃん！」
バラ園の真ん中で理子がくるっと振り向く。
俺は理子と昔会った気がするんだよな…
「相変わらずの改造制服だな、何だその白いふわふわは」
「キンジ、あれは白ロリ風のアレンジだと思うぞ」
「分かるお前が怖いな」
俺が知っているのは変態だからではない、理子に散々教えられたからだ。
「しんちゃん分かってるー！キー君いい加減ロリータの種類くらい覚えようよ～」
「丁重に断る。お前は何着改造制服持っているんだ？」
指を折りながら数を数える理子を無視して、俺もキンジもバックの中から、厳重に包装されたゲームを取り出す。
「理子、こっち向け。ここでのことはアリアには秘密だぞ」
「うー！らじゃー！」
理子は両手でびびっと敬礼（？）のポーズをとる。
苦い顔で俺達がゲームを渡すと理子は息を荒げて袋を破る。まるでケモノだな。
「うっっっっわぁーーーー！『しろくろっ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だよぉー！そして、しんちゃんからは…『あかね色に○る坂ぽーたぶる』と『ましろいろシン○ニーｍｕｔｓｕｎｏ－ｈａｎａ』だよ！」
ぴょんぴょん跳ねながら理子が振り回しているのは、Ｒ－１５指

定のゲーム、いわゆるギャルゲーというゲームだ。
まぁ、ギャルゲーはスルーして、呼び出した理由は、アリアに関してだ。
なぜ俺達を奴隷にしたがるのか、についてだ。
「まぁ、そのゲームはやるから、アリアについて調べたこと、きっちり話せよ？」
「――あい！」
理子はネット関係において武偵向きの趣味を多く持っていて、さらにランクはAだとか、まさに情報の怪盗だな。
「まずは強襲科について――と思ったが、後で桜火に聞いたほうがいいな。じゃあ、あいつの実績とかは？」
「それなら、すっごい情報があるよ、今は休業しているけど、ロンドン武偵局では、９９回中一度も犯罪者を逃がしたことがないんだって」
「いちども…だって？」
武偵に回ってくる仕事といえば、警察の手に負えないようなやばい奴ばっかだ。それを９９回連続でだと？
「あーじゃあほかに、体質とかは？」
「お父さんがイギリス人とのハーフだね」
「てことはクォーターか」
「あとは…H家の事かな、イギリスのサイトググレば一発で出ると思うよ」
「…俺は英語駄目なんだ」
本当は、知ってるがな。
「ははは、がんばれやー」
理子の小さい手が俺の肩を叩こうとしてすかぶった、そしてキンジの腕時計をはたき落した。
「うわぁ！ごっめーん！修理させて！」
「まぁいいけど…」
「ほかは、何かある？」

理子は制服の胸の部分に時計をなおしながら聞いてきた。
「いや…いい」
キンジが唾を飲みながら言った。
あぁ見えたんだな、あの金色が。

マンションに帰ると、アリアがいた。
…どうやって入った？
「遅い」
俺は愚問だろうが聞いてみた。
「どうやって入った」
「わたしは武偵よ」
ほら愚問だった。
カードキーを偽装したのだろう。鍵開けは武偵の基礎だからな。
「お前、今まで一人も逃がしたことがないそうだな」
「あら、わたしの事調べたの？でも――――」
アリアは壁に背を向け蹴るような動作をした。
「――――この間一人逃がしたわ。生まれて初めてね」
「へぇすごい奴もいたもんだな。なぁキンジ」
「あぁ、誰を取り逃がした？」
理子の情報にも間違いがあったか。
「あんた――――桜火よ」
俺は驚きのあまり、思い切りむせた。
「げほっげほっ、なんで俺だよ！俺は犯罪者か！」
「犯罪者じゃなくても私から逃げたのは、あんたが初めてよ」
もう俺は何か言う気が失せていた。
キンジ、変わってくれ。
「とにかく！あんた達なら私のドレイに出来る気がするの！強襲科に戻って、あの弾をよけた実力もう一度見せてみなさい！」
「あれは…あの時は…偶然に避けられただけだ。俺はEランクの大

したことのない人間だよ。残念でした、帰ってくれ」
「嘘ね、1年の時、あんたはSランクだった」
やはり、武偵は情報戦。そこを握られると、やりにくくなるのは分かる。
「つまり、あれは偶然ではなかった！私の目に狂いはなかった！」
「とにかく、今のキンジには無理だ。帰ってくれ」
「今の？ということは何か条件があるの？言ってみなさいよ。協力してあげるから」
協力するな！協力するってことは、キンジに『性的興奮』させるってことだ、とても無理だ！
「無理だ！キンジのやつは協力して出来るようなものじゃない、帰れ！」
キンジが外を見て何か考えている。何をしているんだ？
「――――1回だ」
「1回？」
そういうことか。一回強襲科に戻ってそしてチームを解消するのか。
「戻ってやるよ、強襲科に。ただし、組むのは1回だけで最初に起きた事件を解決する。それが条件だ」
「…」
武偵高では自分の科目ではない科目も自由で受けることができる。これは自由履修と言って単位には反映されないのだが、多様な技術を必要とする武偵という仕事に就くため、生徒たちは割と流動的にいろんな科の授業を受けているのだ。
キンジはＨＳＳがばれる前に、通常の自分を見せつければいい。そうすれば、何もないキンジに失望して、離れていってくれるだろう。――――という考えなのだろう。
「いいわ、じゃあこの部屋から出て行ってあげる」
キンジの譲歩案にやっと――――疫病神が出ていくことを宣言してくれた。

「ただし、どんなに小さくても1件だぞ」
「OK、どんなに大きくても1件よ」
「分かった」
「ただし、手を抜いたら風穴よ」
「ああ。約束する全力でやってやるよ」
――――通常モードの俺でな。
――――本気モードの俺でな。

4（後書き）

ゲームが実際にあるものなんて、気にしない。

5

キンジは戻ってきてしまった。
強襲科――通称、『明日無き学科』に。
この学科の卒業生生存率は、９７．１％。
つまり、この学科の１００人に約３人の割合で生きてこの学科を卒業できない。任務の遂行中、もしくは訓練中に死亡しているのだ。本当に。
それが強襲科であり、武偵という仕事の暗部でもある。
銃撃や剣戟の中でキンジは、装備品の確認や、自由履修の申請など、ほかの事で時間を使ってしまった。
キンジは強襲科の中ではかなりの人気がある。だが強襲科のあいさつは過激なもので――
「おーう！キンジ！お前はぜったいここに帰ってくると信じてたぞ！さぁ、ここで１秒でも早く死んでくれ！」
「まだ死んでなかったのか夏海。お前こそ俺よりコンマ１秒でも早く死んでくれ」
死ね死ね言うのがここの挨拶なのだが、キンジは全員に死ね死ね返してたら、２時間ほど喰ってしまっていた。

俺は強襲科を後にして、学園島を歩いていた。
強襲科のやつは相手にならんし、何よりランクを悟られたくない。
格闘の訓練したら、腹が減ったので俺は駅に向かう。
あれは…レキか？暇だし、試しに飯にでも誘ってみるか。
「おーいレキ、飯食いに行かねえか？」
レキは少し考えるように、頭を少し傾けた。
――多分、断られるだろうな。
「いいですよ」
なに！？レキがＯＫしてくれただと？

ロボットレキと呼ばれている通り、レキには感情がほとんど表に出ない。
「じゃあ、行くか」
コクン。
レキがうなずいてついてくる。何かこれ、視線を感じるな…。

俺達はモノレールに乗ると、3つ目の駅で降りた。このあたりに俺のよく行くラーメン屋があるんだよな…
「ここだ、入るぞ」
「いらっしゃいませー」
この声、どこかで――――
「マイ!?何故お前がここにいる!?」
――――マイかよ!レキもいるし、これは言い逃れ出来ん!
「――――先輩。このことは後でじっくりと聴きますからね…。レキさん!お久しぶりです!」
レキは、コクン、とうなずいている。
そういえば、マイは尋問科の授業も受けていた気がする。確か、ランクはBのはず…。それより俺は不思議なことを聞いた。
「ん?マイとレキは知り合いなのか?」
強襲科のマイと狙撃科のレキは接点がないはずだが…
「そうですよ、故郷が一緒なので」
「へぇ、そーなのかー」
特に興味がなかったので適当に流す。俺達は席に着くと、頭に入っているメニューを頼んだ。
「大盛りラーメンと餃子を一つ。それと、レキには一番高い奴を頼む」
俺の財布には2万ほどあったから大丈夫だろう。
俺は暇になったのでレキに話しかける。
「お前は、よくこういうところに来るのか?」
「いいえ」

「ほかのやつとは来たりするのか？」
「いいえ」
…何か、会話が続かないな。
「じゃあ、クラスのやつには誘われるのか？」
「はい」
「じゃあ、なんで今回は来たんだ？」
「桜火さんだからです」
…クラスのやつには誘われるのに、俺と一緒には来るのか？
「はーい、ご注文の品です」
俺の前には、大盛りラーメンと餃子がおかれ、レキの前には、バケツに入ったラーメンがおかれた。
いやいや、これは何かの嫌がらせだろう。そう思って俺がきくと…
「これは今月からの新メニュー、バケツラーメンです。価格は2万円、15分以内に食べたらタダです。よーい、始め！」
俺も食べながらレキを見る。
おい、レキのやつノーモーションで喰ってやがる！頼むから倒れないでくれよ、俺の喰い逃げと、お前の命なら、完全にお前の命のほうが大事なんだから。
俺が麺を喰い終わるうちに、レキも麺を喰い終わっていた。
おいおい、麺3倍はあっただろう。
そのままレキが汁まで飲み干すと、きっぱりと言い放った。
「――私の感覚では、今、マイさんが測定を開始して5分16秒です」
すごすぎる、大食い選手もこんな速さで食べきれないものを、ものの5分で喰いやがった。
「あぁ、これは悪夢だ…きっと悪い夢なんだ…」
分かるぞ、マイ。
お前はまだ1年、まだ常識外れなものを見ることがないんだ。
俺は自分の部屋に帰ってきていた。キンジも帰ってきていたらし

くソファに座っている。
「キンジ、今日はどうだった？」
「散々だ、アリアにゲーセンで振り回されてた。そっちは？」
「俺はレキのすごさを垣間見た気がするぜ」
今日は疲れた…もう寝よう。

翌朝、俺は時計をラーメン屋に忘れていたことに気づく。
「キンジ、今何時だ？」
「7時37分だ。」
「もう少しいるか」

おかしい、俺達はちゃんと早く出たはずだ。なのに、大粒の雨が降り始めたバス停には7時58分のバスが止まっていて、生徒がすし詰め状態で乗り込んでいるところだった。
「やったー！乗れた！おはようキンジ！桜火！」
そして無情にも、バスの扉は閉ざされていった。
「――――歩くか」
「そうだな」
俺達は武偵高に向けて歩き出した。

強襲科の体育館の前で、キンジの携帯が鳴った。
『キンジ！今どこ？』
少し声が聞こえるが、多分アリアだろう。でも、今は8時20分、アリアは今1時間目の授業中のはずだ。
「今は強襲科の近くだ。」
『ちょうどいいわ、今からC装備に着替えて、女子寮の屋上に来なさい。いますぐ』
「何だよ、強襲科の授業は5時間目のはずだろう？」
キンジが文句を言うと、アリアはこちらに声が聞こえるくらい声を荒げた。

『授業じゃないわ、事件よ！』
俺は目が眩んだ。

俺達が屋上に出ると、俺達と同じ、C装備のアリアと、制服姿のレキがいた。
「レキ、お前もアリアに呼ばれたのか」
「はい」
レキは狙撃科のSランク、天才児だ。基本的にドラグノフ――――狙撃銃を使う。
「時間切れね」
無線をしていたアリアがくるっと俺たちに向き直る。
「もう一人くらいSランクが欲しかったけど、ほかの事件でいないみたい」
アリアの中では、キンジはSランクらしい。
「4人パーティーで動くわよ」
「その前に作戦説明しろ。で、何の事件何だ？」
「バスジャックよ」
「――――バス？」
「武偵高の通学バス。7時58分にあんた達のマンションに停留したやつ」
なんだって！？
あれには俺の知ってる武藤、不知火、マイ達がすし詰め状態で乗ってるはずだ。
「犯人は、いるのか」
「多分いないでしょうね、バスに爆弾が仕掛けられているわ」
――――爆弾――――
俺とキンジは、前回のチャリジャックが脳裏を横切る。
「犯人は『武偵殺し』あいつの電波をキャッチしたわ」
武偵殺しは毎回同じ電波を使っているのだろう。
「おい、『武偵殺し』は逮捕されたんじゃなかったのかよ」

「それは真犯人じゃないわ」
「おい、まて、お前は何の話を――――」
そこでヘリが来た。
「あぁもう！やってやる！」
前方で、キンジとアリアが話している。なにを話しているのかは、ヘリの音で聞き取れない。

『警視庁と東京武偵局は動いてないのか？』
『相手は走るバスよ？それなりに準備が必要になる』
「じゃあ、俺達が一番乗りか」
インカムを通して会話する俺達は、バスが見えるまで待った。
『見えました』
レキが外を見て言う。
――――どれだ？
『ホテル日航の前を右折したバスです』
「よく見えるな。視力幾つだ？」
『左右ともに６．０です』
４．０の俺よりいいじゃねぇか。
『空からバスの屋上に飛び移るわよ。キンジは中、桜火はそのまま上で待機、敵が来次第つぶして頂戴。レキはヘリで援護』
『中に犯人がいたらどうするんだよ？』
『『武偵殺し』なら中にはいない』
『『武偵殺し』じゃないかもしれないだろ！』
『その時はなんとかしなさい。あんたなら出来るでしょ？』
こいつは危険だ。あまりにもパーティーの実力を過信している。
俺は構わないが、キンジなら命を落とすぞ。
「今のキンジには無理だ」
『死にそうになったら、あたしが助けてあげるわ』
訂正、自分の実力もだ。

俺達は強襲用のパラシュートで、ほぼ自由落下の速度でバスの屋根に落ちる、そこでなまっていたのか、キンジが落ちそうになる。
「キンジ！あぶねぇだろ！」
俺はキンジに手を伸ばして落ちるのを阻止した。
「すまん！」
「キンジは中を頼む！」
キンジが中に降りてゆき、アリアがいないことに気付いた。たぶん、バスの下の爆弾を解除しているのだろう。
そこで俺は、後ろから、黄色の無人の外車が突っ込んでくるのが分かった。
「アリア！」
俺はアリアのワイヤーを引き上げると、ヘルメットが割れたアリアが上がってきた。
大きな外傷はないが、額にバツの傷があり、俺はバスの中にアリアを入れに下に降りた。
俺が下にいると、数名けが人がいた。
アイツは…マイ！
俺はマイはけがをしているが命に別状はないようだが、
「せん…ぱい…？」
マイは頼るような目で俺を見てくる。そこで俺はＳＳになった。
「あぁ、行ってくる」
俺はバスの上に出ると、２丁の銃、Ｃｚ７５と、オートマグ？を構え、黒い本体に、美しい桜が描かれたナイフ、『夜桜』と、銀色の本体に黒い桜が描かれたナイフ、『墨染桜』の２本を手首に嵌め、２本の日本刀、『烈火』と『霧雨』をトンファーのように構えた。
これが俺の本気、『双銃四剣』（シクサ）だ。
さらに、背中では１０本のナイフや剣が翼のように広がった。――『無限剣』だ。
この状態は、ＳＳの時しかなれないが、その代わり人間を超える動きが出来る。

「『砂薙』」
俺は構えた『烈火』を、音速を超える速度で横に薙ぐと、後ろの無人外車は大破した。
音速を超え、ソニックブームで外車を斬ったのだ。
「レキ、お前の狙撃で爆弾を撃ち落とせるか？」
『はい、出来ますが、爆弾を捜索するのに2分ほどいただけますか？』
「あぁ、大丈夫だ。あと、マイが負傷した。衛生科を呼んでくれるか？」
『分かりました』
俺がレキと無線で話し終わると、ＵＺＩ付き無人の外車がバスを取り囲んでいた。
「さて、レキが爆弾を捜索する間に、俺はこの周りの外車をどうにかするか」
数は１０台といったところか。
「『砂嵐』」
俺は１０本の刀をそれぞれ外車に向けてはなった。その間、０．１秒。
それぞれのセンサーが感知する前に全ての車を大破させて、刀を背中に戻した。このモードのときには、超能力（ステルス）も使える。
『場所、特定しました』
「よし、撃ってくれ」
『はい。――――私は、一発の銃弾』
インカムからレキの声が流れた。
これは、レキが狙撃をする際の、癖だ。
『――――銃弾は人の心を持たない。故になにも考えない』
『――――ただ、目的に向かって飛ぶだけ』
レキは、その銃口を3回光らせた。
後ろを見ると部品ごと飛ばされた爆弾が転がっている。
『――――私は、一発の銃弾――――』

そのまま爆弾は飛ばされ、海に落ちた。
――――ドゥゥゥウウウン！！！！
海の中で爆弾が爆発し、大きな水柱を立てる。
俺は、装備していた『夜桜』『墨染桜』『烈火』『霧雨』を『無限剣』に直し、収納したところで、ＳＳの効果が切れ、意識を失った。

6

気がつくと、俺は武偵病院にいた。
任務の途中で意識を失ったのは覚えていたが。今日は事件の翌日だそうだ。俺の部屋には、キンジ、涙目のマイ、見舞いに来てくれたレキの４人がいる。
「結局事件はどうなったわけ？」
俺はキンジに聞くと、キンジは悔しそうな顔をしていった。
「犯人は捕まらなかった。犯人が使っていたホテルも見つけたが、証拠はなし。んじゃ、俺はアリアの見舞いに行ってくるから」
と言ってキンジは出て行った。

俺は退院手続きを終え、アリアの病室に来た。
中からは、キンジとアリア言い争う声が聞こえる。
――――なんだよそれ！意味わかんねーよ！
――――あんたが、武偵をやめる理由なんて、大したことじゃないにきまってるんだから！
俺はそのことを聞いた瞬間、アリアの病室に入って行った。
「おい！アリア！今何て言った！キンジ、あれ言っていいか？」
「……いや、俺が言う」
すまんキンジ。
「俺と桜火はなぁ！海難事故で兄さんと姉さんをなくしてるんだ！それも、乗員乗客を全て避難させたうえでだ」
「そ、それが何だっていうのよ」
「それで遺族の俺達はなぁ、憧れだった兄姉をなくして、さらにその兄姉を『船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった無能な武偵』と非難された！だから俺達は武偵をやめる！お前にこの苦しみが分かるはずもない！」
キンジがそこまで言うと、アリアも何も言えなくなった。

「帰るぞ、桜火」
そこでアリアが何かつぶやく。
「わかったわよ…私が探してた人たちは、あんた達じゃなかったんだわ…」

翌日、俺はイライラしていて街に出ていた。理由はもちろん、アリア。
イライラしているが、何もすることのない俺は、ただぶらぶら歩いていた。そのまま30分ほど歩いた俺は、アリアを尾けているキンジを見つけた。
「何もすることないし、尾けてみるか…」
そのまま新宿まで来ると、新宿警察署で足をとめた。
「下手な尾行。尻尾がにょろにょろ出てるわよ？」
――――キンジは見つかったか。さて、俺も種明かしするか。
「俺には気づかなかっただろう？」
「桜火、いたのか？」
アリアは首を振った。
「ええ、まったく気付かなかったわ」
「つか、キンジに気づいてたのならなんで教えなかった？」
「迷ってたのよ、教えるかどうか、まぁ追い払っても付いてくるでしょうから」

面会室で会った人は、アリアの母親だった。
「まぁ、アリア。このどちらかが彼氏さん？」
「違うわ、ママ。こいつらは、遠山キンジと神代桜火、武偵高の生徒で、『武偵殺し』の3，4人目の被害者よ」
「はじめまして、キンジさん、桜火さん、アリアの母で神埼かなえと申します」
「ママ、おとといにはバスジャックも起きてる。ぜったいに『武偵

殺し』を捕まえてやるわ。そうすればママの懲役８６４年が一気に７４２年まで減刑されるわ。他のもぜったいなんとかするから」
―――アリアの言葉に、俺達は目を丸くした。
「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中も全員ここにぶち込んでやるわ」
俺は、アリアの言葉を聞くと、ここにいてはいけない感じがして、部屋を後にした。

「どういうつもりだ、教授…」
そんなことをつぶやきながら帰っていると、理子からメールが来た。
―――至急、クラブ・エステーラに来たれよ。
何か、嫌な予感がしたが、行くことにした。

「し～んちゃ～ん！」
「うるさい、静かにしろ、他人の迷惑だ」
店を見渡すと、武偵高の生徒もいる。出来る限り、事は避けたいな。
そんなことを考えてると、理子が腕を絡ませてくる。
やばい、こんなとこ武偵高の生徒に見られたら誤解され―――――
「やだ桜火、今度は理子ちゃんと付き合ってる」「桜火ってチビ専？」「マイちゃんの事もあるし、そうだと思う」
―――――てるし！もう逃げ場はないな…。
俺は、理子に押し込まれる形で、個室に入った。
「ねぇ、しんちゃん。アリアとケンカしたでしょ」
「そんなこと、お前に関係ないだろ」
「キー君としんちゃんはアリアと一緒にいないと楽しくない！」
理子は、テーブルに会ったショートケーキをフォークでグサリ。
「はい、しんちゃん、あーんして」
「するか、バカ」

「『武偵殺し』」
「何か分かったのか」
「あーんしてくれたら教えてあげる」
かなり嫌なことだが、死ぬわけでもない、情報のためだ、仕方ない。
「あのね、『武偵殺し』の仕業と思われる、『可能性事件』を見つけたの」
制服のポケットから取り出したコピー用紙を、俺に見せつけてくる。
「――――！」
血が凍る。
『２００８年１２月２４日浦賀沖海難事故　死亡　遠山金一武偵（１９）　神代桜武偵（１９）』
「この名前、片方お姉さんでしょう？」
理子の声が聞こえなくなる。
なぜ、姉さんを狙った。
なぜ、姉さんや俺を狙った。
なぜ――――――。
「桜火っ」
理子は、狭い個室の中、俺をソファに押し倒す。まったく話を聞いて無かった。
「桜火、ゲームみたいなこと、しよ？マイは強襲科で戦闘訓練中だし、アリアは明日の7時にロンドンに帰るし」
理子の言葉で、何かがつながった。
「理子、すまん！」
俺は理子の前で、猫だましを使い、上下を逆にする。そして、そのまま個室から出る。
俺の予感が当たれば、明日アリアが死ぬ！

俺は、空港に来ていた。
「明日、7時からのロンドン行きのチケットはあるか？」
「はい、後一枚だけ」
「それじゃ、それを頼む」
そして、教務科に連絡する。
「あ、綴先生ですか？明日のアリアのロンドン行きの護衛するので、明日と明後日休みます。学年と氏名？2年A組、神代桜火です、はい分かりました」
これで、アリアの護衛につく理由は出来た。

翌日、飛行機内にて、アリアと合流した俺は、アリアに罵声を浴びせられていた。
「なんであんたがここにいるのよ！」
「だから、言っているだろ！教務科に命令されたんだよ！」
――――武偵だ！この飛行機の離陸を中止しろ！
キンジか？何で来た？
「ちょっと出てくる」
「二度と帰ってくるな」
俺が通路に出ると、やはりキンジがいた。
「おうキンジ、どうした？」
「なんで桜火がいるんだ？」
それはこっちのセリフだ。

キンジの話を聞くと。この飛行機には『武偵殺し』が乗っているらしい。
「お前、どうしてそれが――――」
「――――お客様にお詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予測されます――――」
ガガガーン！！

雷が鳴ると、アリアは首を縮めた。
「こわいのか？怖いなら、ベッドに隠れておけよ」
「こ、怖いわけないじゃない」
と、言った矢先にまた雷が鳴った。
「キンジ、お前はアリアを頼む。俺は少し機長と話してくる」
俺が、個室から出ると、アテンダントがいたので、俺はそいつに聞いた。
「すみません、機長室は何階にありますか？」
アテンダントはそれを聞くと、少し待って下さい。と言い残して去って行った。
――バン！バン！
これは銃声か！？
俺が、機長室のほうに行くと、さっきのアテンダントが機長と副機長と思われる人物を運びだしていた。
「キンジ！行くぞ！」
俺は、Ｃｚ７５とオートマグ？を抜きながら、後ろから来たキンジにそう叫んだ。
「「――動くな！」」
俺達がそういうとアテンダントは、特徴のない顔を上げながら、何かをこっちに投げやがった。
「Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　ｐｌｅａｓｅ　で、やがります」
これは、ガス缶か！？
「キンジ！みんな！早く部屋に戻れ！」
俺は、そういいながら部屋に駆け込んだ。すると、飛行機がいきなり揺れ、停電した。
「ち、やっぱり『武偵殺し』が乗ってたか」
キンジがそうつぶやくと、機内に非常電源の明かりがついた。
「やっぱり？じゃあお前は『武偵殺し』が乗っているのが分かっていたのか？」
「お前は気付かなかったのか？」

「あぁ、俺は任務で乗っていたからな」
そこでキンジは俺達に説明した。
最初のバイクジャック、次のカージャックで3回目は、俺達ではなく、シージャック。俺達の兄姉が乗っていた事件で、直接対決だっただろうとキンジは話す。そして、俺達のチャリジャック、バスジャックと来て、このハイジャック。ここで『武偵殺し』はアリアと直接対決するつもりみたいだ。
そこまでキンジが話すと、ベルト着用サインが変に点滅を始めた。
これは、和訳モールスか。
オイデ　オイデ　イウー　ハ　テンゴク　ダヨ
オイデ　オイデ　ワタシ　ハ　イッカイ　ノ　バー　ニ　イルヨ
ちっ、よりにもよってイ・ウーかよ。
「誘ってやがる」
「上等よ、風穴開けてやるわ」
アリアは、言いながら2丁のガバメントを取り出した。
「一緒に行ってやる、俺はともかく、今のキンジは使い物になるかわからんがな」
「来なくていい」
ガガーン！また雷が鳴った。
「…どうする？」
「…く、来れば？」

俺達は、床についている誘導ランプに沿って一階のバーに向かう。
一階は、豪奢にバーになっている。
そのバーのシャンデリアの下。
カウンターに脚を組んでいるさっきのアテンダントがいた。
「やっぱりか…」
さっきのアテンダントは、武偵高の制服を着ていた。それも、フリフリだらけの改造制服を、だ。
「今回も、きれいに引っかかってくれやがりましたねぇ」

いいながら、ベリベリと特殊メイクをはいでいく。その下から現れた顔は――

「やっぱりお前か、理子」

――理子だった。

「Ｂｏｎ　ｓｏｉｒ」

キンジの説明の中に、理子から教えてもらった、とあったが裏では理子の手の内で踊っていたということか。

「頭と体で人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にもそういう遺伝的な、天才はかなりいる、でもお前たちの一族は特別だよ、オルメス」

「――！」

理子の単語に、アリアは電流に撃たれたようにとまった。

――オルメス？あぁホームズの事か。

「あんた一体何者？」

「私は、理子・峰・リュパン４世」

リュパンってあのルパンの事か？

「でも家のみんなは、わたしの事を『理子』とは呼ばなかった。しかもそれがおかしいんだよ？」

「おかしい？」

「４世。４世。４世。４世さまぁー。どいつもこいつも、使用人どもまで。おっかしいよねー」

「４世のどこが悪いのよ」

アリアは４世をはっきり言うと、理子は目を見開いて言った。

「おかしいに決まってんだろ！あたしは数字か！？ＤＮＡか！？違う！私は理子だ！数字じゃない！」

突然キレた理子は、俺達にではない、誰かに叫びだした。

「會おじい様を超えなければ私は一生私じゃない。だからイ・ウーに入ってこの力を手に入れた。この力で私はもぎ取るんだ！私を！」

「おい、『武偵殺し』はお前だったのかよ！」

話についていけないキンジは馬鹿な質問をする。

「あんなのプロローグを兼ねたお遊びよ。本命はオルメス４世。アリア、お前だ」
理子の目は、いつものものではなかった。もはや獲物を狙う獣の目。
「１００年前私たちの會おじい様同士の戦いは引き分けだった。つまりオルメス４世を倒せば、わたしは會おじい様を超えたことを証明できる。キンジ、桜火、お前らもちゃんと役割を果たせよ？」
理子の目が、俺に向く。
「オルメス一族にはパートナーが必要なんだ。初代オルメスにも優秀なパートナーがいた。条件を同じにするためにお前らをくっつけてやったんだ」
「アリアと俺達を、お前が…？」
「そっ」
理子は、いつもの理子に戻る。
――――こいつ、演じてやがったのか。バカ理子を。
「キンジ達の自転車に爆弾しかけて、わっかりやす～い電波出してあげたの」
「アリアが電波を追っていることに気づいてたのか」
「そりゃ気づくよ、あれだけ通信科（コネクト）に出入りしてたらねぇ。でも、それでパートナーにならなかったから、バスジャックで協力させてあげたの。」
「バスジャックもお前だったのか…」
「キンジぃー、人に腕時計預けちゃだめだぞー？狂った時間を見ると、バスに乗り遅れちゃうぞー」
やっぱり乗り遅れたのも理子の仕業か。
「何もかも、お前の計画通りだったのかよ…」
隣でキンジかつぶやく。
「んーそうでもなかったよ。チャリジャックで会わせて、バスジャックで組ませてやったのに、くっつききらなかったのは予想外だったの。キンジに、理子がやったお兄さんの話を出すまで動かなかっ

たのは、意外だった」
理子の野郎、キンジに話したのか。キンジが起こるのも無理は無い、キンジは一番慕っていた兄を『武偵殺し』に殺されたのだから。
「お前が…兄さんを…」
キンジが冷静じゃないのが分かる。
「ほらほら、桜火、相棒が怒ってるよ？一緒に戦ってあげなよー？」
やろうと思えばできるが、俺はしない。一つ、気がかりなことがあるからだ。
「キンジ、桜火、いいこと教えてあげる。あなた達の兄姉は…いまイ・ウーにいるの」
「いい加減にしろ！これ以上死んだ兄さんを侮辱するな！」
「キンジ！お前の兄さんは死んでいないかもしれないんだ！理子もやった、とは言ったが殺した、とは言って無い！」
理子は驚いたように目を開いた。
「へぇ、よく気づいたね。どうやって気付いた」
「理子のイ・ウーにいる。というのと、海難事故の時、二人の死体は上がってこなかった。そこから推測した」
「桜火、それは海に沈んだんじゃないのか？」
「いや、それは無い。その事件は俺が任務で海の底まで調べた。しかし周囲１５０ｋｍ内に人間の死体は無かった。これで合ってるだろう？理子」
そう言って理子に向き直ると、理子は肯定を口にした。
「よくわかったな。そこでキンジ、お前にいい話をしてあげる。あなたのお兄さんは、今理子の恋人なの」
キンジが理子にベレッタを向けようとすると。いきなり飛行機が揺れた。
気づくと、キンジの手からベレッタが消え、後ろにベレッタの残骸が落ちる。
理子は、キンジにワルサーＰ９９を構え、笑顔でキンジに言った。
「ノンノン、キンジ、今のお前では戦闘の役に立たない。そもそも

オルメスの相棒は戦闘の相棒じゃないパンピーの視点からヒントを与え、オルメスの能力を引き出す。そういう活躍をしなきゃ」
うっとりとご高説する理子を見て――俺は『夜桜』で理子に斬りかかった。
「おっと、敵の武器が銃だけと思ったら、だめだよ」
俺の頬をナイフがかすって通り過ぎた。その出所を見ると、理子が、髪でナイフを操っていた。
「さすがだな、桜火、だがこのナイフには、即効性の睡眠薬が塗られている。いくらSランクといえど、睡眠薬にはかなわないでしょう？」
ちっ！睡眠薬か！このままじゃ…ねむって…しま……。

7（前書き）

戦闘シーン短くて済みません。本当にごめんなさい。

7

気がつくと、アリアは、ぐったりと倒れ、キンジが叫んでいる。
「アリアっ！アリア！」
深紅が床を染めていく。俺はＳＳになりながら、キンジに叫んだ。
「っ！キンジ！アリアを連れて逃げろ！」
キンジはアリアを抱えながら、走って出て行った。
「早かったね、桜火、かかりが薄かったのかな？」
「あぁ、そのようだな。おかげで『双銃双剣』になったお前と戦える」
理子は、俺を刺そうとしたナイフのほか、左手にもう１丁のワルサーＰ９９と、髪には、もう１本のナイフが握られていた。
「ねぇ桜火、あなたってさぁ、小学１年から中学２年までどこにいたの？アリアの情報を探してる時にあなたの情報探してたけど、小学入学前と、中学２年で強襲科Ｂランクっていう情報しか出なかったけど」
「お前はイ・ウーにいるんだろう？ジャンヌあたりに聞けば正確な情報が得られるぞ」
「なぜお前がジャンヌの名前を知っている」
理子は驚いた顔で俺に問いかける。
「そんなことより、戦闘を開始しないか？お前は俺の仲間を傷つけた、それにより本気が出せる」
背中の１３本の翼を展開し、その中から『墨染桜』、『蒼火』『時雨』を抜くと、それぞれを装着した。
「へぇ、やっぱり桜火が『無限剣』だったんだ」
「正直いうと、この装備だと殺しそうだから『無限剣』はやめさせてもらうよ」
俺は『無限剣』を閉じ、『双銃四剣』の型になる。
「さて、戦闘開始、と行きたいところだが、その前に電話をさせて

くれ」
「いいだろう、命乞いの時間くらいはやる。さっさとすませろ」
携帯を取り出すとキンジにかける。
「あぁ、ありがとう。あぁキンジか？そっちが終わったら操縦室に行ってくれ。あぁ、こっちで何とかする、じゃ」
電話を切ると、理子に向き直る。
「「さぁ！始めようか！」」
俺と理子の声が重なり戦闘が開始される。
俺は理子に突っ込んでいき、理子に向かってＣｚ７５とオートマグ？を連射して撃つ。それは髪のナイフに阻まれたが、一気に接近することができた。そしてそのまま『時雨』を横に薙ぐ、そこで理子にかわされ、理子がワルサーを２発ずつ撃つ。計４発を『夜桜』『墨染桜』『蒼火』『時雨』で斬る。そして２人は接近し、理子が射撃の構えをとると、『蒼火』でワルサーを斬り落とす。
驚愕の顔になっている理子のツインテールを『夜桜』『墨染桜』の峰で叩いた。すると髪からナイフが落ち、顔と顔が当たるくらいの距離で俺は言った。
「理子、お前は初代リュパンを超えるためにアリアを狙ったんだろ？それなら、何もホームズを狙うことはない。確か、聞いた話だと初代リュパンはブラドを倒せなかった。なら、俺と一緒にブラドを倒そう。そうすれば、初代リュパンを超えたことになるし、ブラドから恐怖することもない」
俺は理子を諭すように言うと、理子は涙目になって俺に怒ってきた。
「じゃあ、なんで助けなかった。なんで理子を助けてくれなかった！」
「助ける機会がなかった。と言えば許すか？」
「許すわけない、だけど、理子をずっと守ってくれるなら許す」
よし、これで『武偵殺し』は解決だな。
「じゃあ、一つ条件がある。アリアの母親の裁判で証言をしてくれ、

そうすれば、俺はお前をずっと守る」
「いーよそれくらい」
理子が承諾してので、操縦室へ向かう。
「そういえば理子、俺の姉が生きているのはほんとか？」
俺は理子に凄く気になっていて、事実であってほしいことを言った。
「生きているのとイ・ウーにいるのはほんと、キー君のお兄さんもいる」
「そうか、今から操縦室だが、アリアをあおるようなことは言わないでくれよ！？っと」
飛行機が大きく揺れた。それと何か爆発音もしたから、ミサイルでも飛んできたのか、俺達は操縦室に入った。
「キンジ！状況は？」
「エンジンがやられたみたいだ。桜火、メーター読めるか？」
「あぁ、一応」
俺は、キンジがＨＳＳになっていることに気付いた。
俺がメーターを読もうとすると、アリアが俺を怒鳴りつけてきた。
「桜火！なんで理子がいるのよ！説明しなさい！」
「理子がお前を狙う理由を知っていたから説得した兼、助けた。以上。大丈夫だ、お前の母親の裁判では理子が証言してくれる」
俺はアリアに説明してメーターを読もうとすると、理子がなにが起こったかを説明した。
「さっきの振動はミサイルで、内側エンジン2基をつぶしている。この機体の内側のエンジンは燃料庫の門もしているから、燃料が漏れているはず」
まじかよ、燃料漏れはきついぞ。この位置からだと、羽田が近いか。
「理子！あんたの事は信じられないわ。桜火、燃料は？」
「いや、理子の事は本当だ、５４０、５３５、どんどん漏れてる。

もってあと１５分だ」
　この便には燃料漏れを直す方法は無い。その前に、羽田空港を使う許可を得ないと。
『こちら羽田コントロール、ＡＮＡ６００便、緊急周波数１２７・６３１で応答せよ』
「こちらＡＮＡ６００便、先ほどハイジャックされたが、今はコントロールを取り戻している。パイロット２人が負傷した、今は武偵２人が操縦している。俺は遠山キンジ、ほかは神埼・Ｈ・アリア、神代桜火、峰理子だ。」
『神代だと…？』
「そんなことより、近隣の飛行機の回線を全て開いてもらえないか。そして全員に着陸の仕方を言わせてくれ」
『それは出来るが…とてもそんなことができるとは思えん』
「いまの俺なら出来る。それじゃ、頼みます」

　キンジは１１人の言葉から、着陸の方法は把握出来たらしい。今は計器も読めるみたいだ。
　高度は今１０００フィート、３００メートルくらいだ。
　横須賀上空に差し掛かったあたりで――――
『こちら防衛省航空管理局だ、羽田空港の使用許可はない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ』
「何言ってんだ！こっちは後１５分しかないんだ！防衛大臣に伝えろ！俺が…神代桜火が今まで受けた依頼をマスコミに流されたくなかったら、空港使用許可を出せってな！」
　俺は、防衛省相手に怒鳴っていた。
『神代…。分かった、防衛大臣に掛け合ってみよう』
　アリアがこっちを見て、不審な目をしている。
「あんた…今までどんな依頼受けてきたのよ…」
「それは言えない。言ったら日本が滅ぶからね」
　俺はアリアに不審な目で見られながらも、防衛省の返答待った。

そして、羽田に着陸するのにあと少しでぎりぎりのところで防衛省から連絡が来た。
『羽田空港の使用を許可する』
「キンジ！聞いたか！羽田に降りろ！」
「分かった！」
そこでＳＳが切れ、気を失いそうになり、倒れかけると理子が支えてくれた。
「これで守ってくれるっていう約束が果たしてもらえるね…ゆっくり休んでよ」
「ありがとう。理子…」
そして、そのまま気を失った――――。

8（前書き）

アリア編はこれで終わりです。
すごく短いです。

8

結局着陸は成功し、俺は武偵病院に運ばれ、俺が気がつくと同時に退院させられた。

俺が病院からでると、俺はすぐさま、教務科（マスターズ）に向かった。部屋の移動のためだ。俺は、国からの依頼や、教務科からの依頼を多くこなしているため、部屋の移動が基本的に自由なのだ。

今度の部屋は――――情報科（インフォルマ）

情報科は、男子寮・女子寮が分かれているのだが、俺が申請を出したときには男子寮が全部屋満員で、教務課が「こいつなら大丈夫だろ」という理由で女子寮になっている。

夜になり、俺は運ばれてきた家具を部屋に配置すると、銃声が聞こえてきた。多分、キンジの部屋だろう。教務科から帰ってくるとき、白雪が凄い顔をして走って行ったから、そこらへんだろう。

――――――キンジ、ご愁傷さまでした。

8（後書き）

次は魔剣編です。ジャンヌとの戦闘も短いのでご了承ください。

ａｃｔ２　魔剣編（オリ話含む）　１（前書き）

魔剣編に入りますが、同時進行で桜火のオリ話を進めます。

act2　魔剣編（オリ話含む）　1

――――キンジから話を聞くと、昨日はやはり白雪が部屋に来ていたようだ。
「お前ひどすぎるぞ、移動するなら先に言ってくれ」
「ごめんごめん、急に思いついたことだったし、何か嫌な予感もしていたからね。それにしてもすごかったよ。情報科（インフォルマ）まで銃声と声が聞こえてたし」
昨日白雪が来て、アリアと闘った（や）らしいが、家具とかが死んでいるのを嫌に思ったキンジが止めに入ったらしい。
「それより桜火、なんで昨日いなかったのよ。白雪の相手、１人でつらかったのよ？」
「それはお疲れ、アリア。でも俺の今の部屋は情報科だ。キンジの部屋じゃない」
キンジの正面にいるアリアは、不思議そうに俺を見てくる。
「どうかしたか？」
俺はアリアに当たり前の疑問を持ちかけると、意外な答えが返ってきた。
「桜火、あんた転科したの？」
「お前知らないのか？桜火は国や教務科の依頼をよくこなしているから、基本的にはどこに住んでも自由。それだけの実力者だ」
「いやいや、さすがにＲランク武偵と戦ったら確実に負けるよ」
俺達がそんな談笑をしていると、不知火と武藤がやってきた。
「遠山君達、ここ、いいかな」
イケメン野郎の不知火亮。女子によくモテる、強襲科のＡランク、拳銃はＬＡＭ（レーザーライト）付きのＳＯＣＯＭ（ソーコム）。ナイフ、格闘術、射撃、全体的に信頼が置ける実力の持ち主だ。
「聞いたぜキンジ、事情聴取させろ、逃げたら轢いてやる」
こちらは俺が新学期初日に気絶させた、車輌（ロジ）科の武藤剛気。一輪

車からスペースシャトルまで操縦できるという、乗り物専用の人外だ。
　ちなみに銃は整備が楽だからという理由で、コルトパイソン。装填数は少ないし、音もでかい。武偵向きではない銃だ。
「で、何だよ事情聴取って」
「お前、星伽さんを泣かせただろ」
　さすがは武偵高。情報、いや噂が広まるのが早い。…つか武藤なんでお前はむすっとしてんだよ。
「まぁ、この話は置いといて不知火、お前アドシアードはどうする？」
　アドシアードとは…長いからｗｉｋｉでお願いします。
「たぶん競技には出ないよ。補欠だからね」
「桜火はどうする？」
「全競技で推薦があったが辞退した」
「お前、全競技って、人間か？アリアはどうする？」
「私も競技には出ない。拳銃射撃（ガンシューティング）競技の代表に推薦されたけど辞退した」
「んじゃあ、イベントの手伝いか。何やるか決めたか？」
「私は、閉会式のチアだけやる」
　チア？アル＝カタか。
　アル＝カタとは、簡単に言うと、戦闘をチアリーディング風にしたものだ。
「あんた達は…バンドでもやりなさい」
「すまん、俺は依頼あるからパスで」
　アドシアードまでの期間には、俺は依頼が入っていて武偵高にいない。
「水臭いな、桜火。依頼くらい俺達に頼ってもいいのに」
「すまんな、武藤。そうしたいのはあるんだが、この依頼は教務科からで、護衛の依頼なんだ」
「分かった」

「じゃあ、俺は行ってくる」
そう言って席を立つと、俺は、羽田空港に向かった。

今回の護衛の依頼は、ある金持ちの娘の護衛だそうだ。報酬は１００万、単位２．０にアドシアードの準備免除だ。でも、わざわざ俺に依頼をするなんて、何か裏がありそうだな…
そんなことを考えながら、空港内を歩いていると、茶髪の身長の低い女性にぶつかった。
「ごめんなさい！」
女性はそのまま走り去ろうとしたが、俺は腕を掴んで止めた。
「俺の財布をとってどうする気だ？理子」
女性はそのまま、にやり、と笑って顔の特殊メイクをとった。
「さすがに気づかれちゃうか～。しんちゃんさすが！」
「しんちゃんはいい加減にやめてくれ。で、何でここに理子がいる？大方司法取引をして、帰ってきていて、教務科から来た依頼は改変されていて、俺を呼び出すためだと思うが」
「分かったよぉ、しんちゃんがだめなら、おうくんって呼ぶね！でも、護衛は本物だよ～？。さっさと行きましょ～！」
「おい！待てって！」
そう言って理子は俺の手を引きながら、飛行機へ向かった。

ａｃｔ２　魔剣編（オリ話含む）　１（後書き）

あとがき何しよう…何か思いついたら書きます。

2（前書き）

すみません！学校の色々でネットができませんでした！ストックは溜めれたので、２日に１回は更新します！

2

「あぁ、激しく鬱だ…」
依頼には、娘の護衛とだけあったが、理子に依頼の主を聞くとかなり鬱になっていた。
「よりにもよってアレの護衛とはな…」
アイツ、護衛なんていらないと思うが…。
「それより桜火、ジャンヌにお前の事聞いたぞ」
理子が俺を名前で呼んだ―――『裏理子』か。
「俺の履歴なんて聞いても無駄だったろ？」
「正直無駄だったな。だがジャンヌに聞くと、嬉しそうに話してくれたぞ」
あのジャンヌがうれしそうに…か、昔ではあり得んな。
「そうか、それはよかったな」
この後も無駄な雑談をしていると、依頼者がいる九州、福岡県についた。

「久しぶりの福岡だな、俺は少し博多に行ってくるが、どうする理子？」
「行く行く！絶対行く！」
…何かテンションおかしくないか？こいつ。
俺達は、ここから少し離れた所にある、福岡武偵高へと向かった。

「ここが、福岡武偵高。俺が中一の春の間だけ通っていた福岡武偵中からはエスカレーター方式で上がってこれる。東京武偵高よりは生徒が少ないが、高ランク武偵が多く在籍している」
「しってる、理子も色々調べた」
さすが怪盗、情報が早いな。
「じゃ、俺は知り合いに会ってくるから、お前は好きにしろ」

「じゃ～ついてくね」
「好きにしろ」
福岡武偵高に入り、強襲科に向かっていくと、色々なやつに会った。
「おーい桜火、お前帰ってきたのか？」
こいつは確か…情報科志望だった新井か。
「いや？依頼で来ただけだぞ」
「桜火！後ろの美少女は誰だ？」
こいつは…ＳＳＲ志望だった安勇か。
「峰理子、探偵科のＡランクで、りこりんと呼ぶと喜ぶぞ」
「りこりんで～す！」
わーーー！！！
こいつ、連れてくるんじゃなかった。
「やぁ、桜火君久しぶりだね」
こいつは、大野。不知火みたいなやつだ。
「久しぶりだな、確か強襲科のＡランクか？」
「そうだよ、またいつかみたいに訓練しないかい？」
「すまんな、依頼だから無理だ」
…おいおい、なんでこんなに集まっているんだ？俺の事知っている奴なんてほとんどいないはずだぞ？
そんなことを考えながら歩いていると、目的の人物が話しかけてきた。
「おぉ、桜火、久しぶりじゃねぇか。転校ってわけでもなさそうだしな、何で来た？」
「こちらこそな、真樹。こっちに来たのは俺指定で来やがった依頼だ」
園江真樹（そのえまき）、確か強襲科のＳランク、一年の頃はよくつるんだ仲間で情報科としてのスキルも高くＡランクほどあるってメールで聞いた。
「依頼か、手伝うか？」

「いや、大丈夫だ。危なくなったら電話するから来てくれよ」
「そうか、わかった」

そのころ、東京では、キンジとレキが食事に出かけていた。
「レキ、そんなの大丈夫か？」
レキの前にはバケツに入ったチャーハンが置いてある。このチャーハンは、前回桜火とレキが、バケツラーメンを食べた所の新メニュー、バケツチャーハンだ。
「問題ありません」
そういってレキがスプーンを持つと、前回同様、マイがストップウォッチを持っている。
「15分以内に食べきれば、ただで、それを過ぎれば5000円払っていただきます。じゃあ始めます。3・2・1スタート！」
マイはストップウォッチを開始すると、キンジに向かって、話しかける。
「そういえば遠山先輩、桜火先輩はどこに行ったんですか？朝見たとき以外見てませんが」
「アイツは、教務科からの依頼に行ったよ。帰ってくるのはアドシアード当日だそうだが」
「そうですか…女性関連で何か嫌な予感がします。桜火先輩は大丈夫でしょうか…」
いいながらマイは顔を青くする。
「分からん。アイツは俺同様女性に疎いからな」
それを聞くと、マイは不思議そうにキンジを見た。
「そうですか？整った顔立ちとか、かっこいいところとか、女性に好かれそうな気がしますが」
「アイツは昔、幼馴染を裏切ったとか言ってたな。そこに関係があるんじゃないか？」
なんて雑談をしていると、レキが食べ終わったようだ。

「食べ終わりました。キンジさん、その幼馴染の事と、今回の依頼を少し教えていただけませんか？」
「前回同様早いですね…2分17秒なんて人間の数字じゃないですよ。あ、わたしもお願いします」
「分かった。あいつの幼馴染は、俺やレキと同い年で、銀髪の超能力者（ルス）だそうだ。それくらいしか桜火からは聞いていない。依頼のほうは、九州の福岡に護衛だそうだが、それでいいか？」
「情報、ありがとうございます」
「私も、情報ありがとうございます！」
そうしてマイは厨房に、レキは女子寮へ去って行った。

夕方頃、桜火達は福岡武偵高を後にすると、依頼主の家に向かった。
「はぁ、ここはもう2度と来たくなかったんだがな…」
俺達が今いるのは神代家、福岡最大の金持ちの家であり、俺の実家だ。
この家には、中一の一学期から家を出て行って、一度も帰ってきてない。
玄関にあるインターホンを押すと、中からドドドドドドドドドドと、何かが走ってくる音が聞こえる。
「理子、俺が開けると同時に右に避けろ」
「？何か分からないけど分かった」
3・2・1――――今だ！
ガラッ、と玄関の扉をあけると、中から女性が飛び出してくる。
そこで桜火と理子は右に避けると――――
――――ズシャァァァァァ！！！と女性は盛大に顔からこける。
「大丈夫か？姉さん」
この女性は神代桜輝（しんだいようき）、桜火の姉であり、今はイ・ウーにいる神代桜の妹で、普通の武偵より格闘術が得意な普通の高校3年生である。

「桜火！４年もどこ行ってたの！お姉ちゃんが大好きな桜火と遊べないじゃない！」
訂正、少しブラコン気味。
「東京武偵高だ」
「まぁいいけど。で、そこの女の子はどこの誰ですか？」
変わり早いな！
「姉さんの護衛のパートナーの峰理子だ」
「で、家（うち）の桜火とはどんな関係で？」
なんで俺との関係を聞いてくるんだ？まぁ、理子が余計なことを言わないように祈るだけだ。
「はいは～い！りこりんは、おうくんの彼女です！」
バキィ！パラパラパラ……
おいおい、姉さんの手のひらの砂利が砕け散ってるよ！怖いよ！
「ほんとなの？桜火…」
「違う違う！今のは理子の嘘！俺に彼女なんていない！」
なんで身内に対して浮気がばれた夫みたいなことしないといけないの！？しかもなんで理子は、残念そうな顔をするの！？え、何これ期待あり！？で、なんで二人とも臨戦態勢取るの！？
「もうこの話は終わり！姉さんは理子と闘おうとしないで、さっさと親父のところに連れて行ってくれ」
「もう、桜火がそういうならこの娘と闘うのはやめるけど」
「私も桜火が言うのならミンチにするのはよすよ」
正直、帰っていいですか？この二人の間にいると、死にそうなんですけど…

俺達は、親父のいる客間に行って依頼の内容を聞いていた。
「じつは…桜輝が狙われとるんだ」
「それだけで俺を呼んだのか？そんな依頼、福岡武偵高に頼めばいい話じゃねぇかよ」
実際、護衛の依頼は多数ある。総理や有権者などのえらい人を護

衛する依頼、一般人を護衛する依頼、そして、俺が今受けている金持ちの護衛だ。金持ちの依頼は、報酬が多くもらえるため、人気が高く、比較的実力の乏しい武偵でも、チームで受けて成功させやすい依頼だからだ。

「いや…福岡武偵高にも依頼したのだが、桜輝の気に召さなかったらしく、桜輝が追い払っていたんだ。そこで、小さいことから気に入っていたお前を呼んだのだ」

「で、さっき姉さんに伝えたら、俺が襲われる形になったと」

人の好き嫌いが激しいとは桜姉さんから聞いていたが、ここまで激しいとは…

「はぁ、俺は疲れたから飯食って寝させてもらうぜ。俺の部屋の防弾機能はまだあるのか？」

「あぁ、残してあるが…何に使うんだ？」

何か嫌な予感がするので、俺は姉さんと理子にこんな提案をする。

「姉さん、理子、今日は俺の部屋で寝てくれ。理子、部屋の位置は姉さんに聞いてくれ。俺はリビングのソファで寝る」

今日は疲れた…飛行機の中では理子がこっちにすり寄ってくるから休めなかったし、福岡武偵高ではみんなが集まってくるから仲のよかった友達ともほとんど話してないし、こっち着いてからは理子と姉さんが両隣にいてにらみ合ってるし、かなり疲れた…

俺はリビングにあるソファに身を沈める。そのまま意識は闇に落ちた……

2（後書き）

コメントとか評価とか、してくれるとうれしいです。

3

次の日、俺は少し早起きしシャワーを浴びて、自分の部屋に向かった。

「おーい、もう少しで7時になるから起きｒ――――――」

ヤバイ、この光景はキンジには見せられない。

俺のタンスやソファは何か物理的に破壊されたように、無残に粗大ごみと化している。その中で、傷１つ入っていない俺のベットで姉さんと理子が眠っている。いや、寝ていることは問題じゃないのだが、寝かたが問題だ。理子も姉さんも仰向けに寝ており、胸の部分のボタンが３つほど開いてしまっている。もう少しでキンジの言う魔窟が見えそうだ。

俺はその中でベットに近寄らない程度に部屋を歩きながら、ベットの横にある壁へと向かった。ここの壁には防弾、防斬が施されていて、ＲＰＧ（ロケットランチャー）程度では傷も付かない金庫が隠されている。

「よかった、ここは無事か……。おぉあったあった」

俺は中にあったＡＲ（アサルトライフル）のＵ，ＳライフルＭ１４を取り出し、ベットの反対側の隅っこで整備を始めた。

３０分後、整備が終わり、ＡＫをかついで部屋を出ようとすると、理子と姉さんが跳ね起きた。

「うぉ！びっくりした」

おい！起きてたなら最初に来た時に起きろよ！

「びっくりしたのはこっちだよ、おうくん！なんで何も構ってくれないの！？」

「そうだよ桜火！せっかく峰さんと色仕掛けしたのに！」

おい、姉さん。弟相手に色仕掛けってあんた頭大丈夫ですか？

「つか、姉さん、いつ理子と仲良くなったんだよ」

「？桜火の中一の頃の女装写真見せたらいつの間にか――――」

「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ

ｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
止めてくれ！俺のトラウマを引きずり出すな！頼むからやめてくれ！俺が俺の部屋にこいつらを置いておいたことが間違いだった！
「おい、姉さん！あの写真は全部焼き捨てたはずだろう、なんで今ここにあるんだ！？」
あれは写真が返ってきたときに全部焼いたはずだ！あるはずがない！
「え？フィルムがあるから焼き増ししてもらっただけだよ？」
「しまったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
フィルムとは、俺の人生での失態！
「おうくんって女装でもイケるんだね～理子いいこと聞いちゃった～」
「今は全部３枚ずつ、１枚目はアルバム通称『桜火写真集』に、２枚目は使用用に、３枚目は人に見せるためにいつも持ち歩いているよ」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：」
使用用ッて何だ！？何に使ってるんだ！？
「大丈夫桜火！？人の言語失ってるよ！」
もう駄目だ……おしまいだ…武偵高に戻ったら理子に全てばらされるんだ…鬱だ…
「……死のう」
俺は首にナイフ、『墨染桜』『夜桜』の２本を当て、自殺の構えをとる。
「まだ死んじゃ駄目だよおうくん！理子との約束守ってくれてない！」
「そうだよ！まだ桜を見つけてないでしょう！？」
「もういいんだ、もう死のう……さよなら理子、姉さん」
「――――バカかテメェは」
――――チュン！
９ｍｍパラペラムだと思われる弾丸が、桜火の頬を掠める。

「あぶねぇだろうが！真樹！てかお前がなんでここにいる！学校はどうした！」
真樹は気にせず部屋に入ってくる。
「今日は武偵高もお前の姉ちゃんが通ってる高校も休みだ。俺がどこにいてもカンケーねーだろ」
それはそうだ、桜火に真樹のプライベートは関係ない。
「だけど人の部屋に入ってきて、いきなりｍ９３ｒぶっ放すなよ、あぶねえだろうが」
ベレッタｍ９３ｒ、ｍ９２ｆの改良版として作られた銃で、フルオートが改造なしで使えるある意味気持ち悪い銃だ。ただし、このｍ９３ｒは、政府により依頼されたときにしか生産されず一般の武偵では持つことが許されていない。真樹は…まぁあれだ、特別な存在だ。
「人が遊びに来た時に、その遊ぼうとした人間が、自殺しようとしてたら普通乗り込むだろ？」
それはごもっとも。
「で？何しに来たんだ？俺は依頼でいるんだ邪魔はしないでくれよ」
「あぁ、分かってる。依頼は護衛で、護衛の相手はお前の姉ちゃんだろ？」
お前それをどこで――――と言いかけて、俺は口をふさぐ。
こいつは科目は強襲科でも、情報収集能力はＡランクだ。東京武偵高にでもハッキングしたんだろう。ぜったいに見つからないルートを使って。
「んじゃ、どうする？いったん部屋を片付けて何かゲームでもするか？理子はあるよな。真樹、姉さんｐｓｐ持ってる？」
「理子は、いつも持ってるよ～」
「俺も持ってる」
「私は無いよ、ゲームなんて、昔少ししただけで今はほとんど――――」
「じゃ、買いに行くか。博多駅あたりに行けば売ってるだろ」

予定の無かった俺は、少し強引と思いながらも、予定を決めた。

そのころキンジ達は学園島の端の通称『看板裏』にいた。

「あぶねぇ…」

今のキンジの体制は、若干反った体制で刀が寸止めされている状況だ。

刀の持ち主はもちろんアリア。

「今のタイミングで５００回イメージする。制限時間は１０分、始め！」

「イメージ？」

「そう、イメージ。シャドーボクシングみたいに手を動かしてもいいわ」

くるっ、シャキ。

流れるような動作で背中に刀をしまうアリア。

「要するに、ただのイメージトレーニングか」

「こっちは今からタンコブ量産してもいいんだけど？」

さすがにタンコブ量産はやだな。ここは素直に従っておくか。

「分かった分かった。やりますよ」

キンジは深ーくため息をすると、しぶしぶ刀をつかむイメージをし始めた。

「そうそうキンジ、ママに冤罪を着せたイ・ウーには剣の名士もいるんだから、対ナイフ術は武偵の基本。しっかりやりなさいよ」

「やるやる、やってる」

「無駄口叩かない！ペナルティマイナス３０秒！」

そう言ってアリアは『チア』の練習を始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7056w/

緋弾と無限剣

2011年10月7日18時53分発行